〈訳者あとがき〉

トランスワールドへようこそ！

本書は Paul B. Preciado, *Countersexual Manifesto*, translated by Kevinn Gerry Dunn, Columbia University Press, 2018 の全訳である。ただし、著者プレシアドの指示で、「序論」の部分だけは、二〇二〇年に本書の出版二〇周年を記念してスペイン語版として出版された *Manifiesto contrasexual, Edición del 20.º aniversario con una nueva introducción del autor*, Traducción de Julio Díaz y Carolina Meloni, Editorial Anagrama, Barcelona, 2020 に新たに付された「『カウンターセックス宣言』への新しい序論」から訳出した。

本書の成立過程はややこしい。まず最初に二〇〇〇年にフランス語で出版され、それが二〇〇二年にプレシアドの「母語」であるスペイン語に翻訳され（その際に著者がかなりの加筆をおこなっている）、そしてそのスペイン語版から、本訳書が底本とした右記の英訳がなされたわけだが、その際にプレシアド本人が英訳を確認（場合によっては一緒に翻訳）し、さらに数々の箇所で加筆・修正・削除を大々的におこない、英訳独自の「序論」も付した。その結果、最初の仏語版、その翻訳であるスペイン語版と、本書が底本とした英訳版はほぼ別物といってよいものに変容（ミュータント化）している。一応、著者本人は英訳が決定版と言っているが、二〇二〇年に出版された『カウンターセックス宣言』二〇周年版（英訳からのさらなるスペイン語訳版である）には、この英訳版「序論」をさらにスペイン語版オンリーの「『カウンターセックス宣言』への新しい序論」に差し替えている。

このように、『カウンターセックス宣言』は、それが翻訳・出版されるたびに著者自身が介入し、次々と文

章を上書きしていくという独特な生成変化のプロセスを経ており、こうした錯綜体としてのテクストの成り立ち自体がすでに哲学的・思想的に深い意味を醸し出している。もはや原書なのか翻訳なのか、著者なのか翻訳者なのか（あるいは註釈者なのか）判然としない多数多様体としての各個物の存在様態（デリダ流に言えば「亡霊」様態）こそが、プレシアドが主張する「トランス」の運動性そのものの表現となっているとも言えるだろう。さらにそこに私は日本語による「トランス」を、翻訳（trans-lation）を、付け加え、代補しようというのである。はたして私は何を翻訳しているのか。本書は何の翻訳なのだろうか。

ポール・B・プレシアドは、現在、世界で最も注目されているトランスジェンダーの思想家である。一九七〇年九月一一日（！）、スペインのブルゴス生まれ。レコンキスタの英雄エル・シッドの街であり、スペイン内戦ではフランコ反政府軍の拠点でもあったブルゴス。その保守的で厳格なカトリックの街と家に生まれ、「女性」の性を割り当てられた「彼女」は、早くから性的違和を覚えるトランスであることに苦しんだようだ。三〇代半ばからテストステロンを使ったオペなしの「緩やかなトランス」を開始し、二〇一五年にはベアトリスという出生時に与えられた女性名からポールに名前を変え、二〇一六年には戸籍上の性も変更し公式に「男性」となり、ベアトリスという女性名を放棄した。もともとはラディカル・フェミニストであったが、現在はノンバイナリーなトランスの立場をとっている。

一九九〇年代にフルブライト奨学生としてニューヨークに留学。ニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチで、ジャック・デリダとアグネス・ヘラーに師事。二〇〇〇年にパリに移り、フランス最初のドラァグキングのアトリエを組織する（二〇〇二年）などの活動をした後、アメリカに戻ってプリンストン大学の建築学科で二〇〇四年に博士号を取得した（この博士論文をもとにした著作が『ポルノトピア』である）。そのほかにも、パリ第八大学のプロジェクト研究員、ニューヨーク大学やプリンストン大学の招聘教授を務めたり、バルセロナ現代美術館やソフィア王妃芸術センターのキュレーターとして幅広く活躍している。

主要著作は以下の通り。

Manifeste contra-sexuel, Paris, Balland, 2000.
Testo junkie : sexe, drogue et biopolitique (trad. de l'espagnol par l'auteur), Paris, Grasset, 2008.
Pornotopia: an essay on Playboy's architecture and biopolitics, New York, Zone Books, 2014.
Un appartement sur Uranus : Chroniques de la traversée, Paris, Grasset, 2019.
Je suis un monstre qui vous parle : Rapport pour une académie de psychanalystes, Paris, Grasset, 2020.

カウンターセックス宣言

カウンターセックスとは何か。文字通りには「反セックス」あるいは「対抗セックス」である。もちろん、無セクシュアリティ（性や性欲をまったく感じない存在様態）までをも視野に収めるが、直接的には特に近代の性愛体制である異性愛的セクシュアリティに反抗し対抗する、他なる多様なセクシュアリティの主張である。第二波フェミニズムあるいはラディカル・フェミニズムが抉り出したように、バイナリズム（男女二分法）の異性愛主義は、家父長制的な政治・経済・社会構造が生み出した社会的構築物であり、決して自然なものではない。この社会的構築物であるいわゆるジェンダー（性差、性同一性）が、政治や経済の権力、家族や地域といった社会権力、道徳や宗教のモラル権力、そして医学・生物学・心理学などの科学権力と密接に絡み合いながら、男女の異性愛があたかも「自然」で「必然」であるかのように思わせてきたのである（異性愛的想像界）。

しかしこうした社会構築主義的な批判や家父長制打倒の闘争のみであれば、すでに旧来のフェミニズム（マルクス主義フェミニズムであれ、ラディカル・フェミニズムであれ）がおこなってきたところである。その成果をプレシアドは否定するわけではない。「フェミニズムの言説が、女性の身体を自然の歴史としてだけでなく政治の歴史の産物として描いたときの力は、間違いなく二〇世紀の最も偉大な認識論的切断の一つだった」（本書一六二頁）とプレシアドは評価している。しかし、それだけでは足りない。伝統的なフェミニズムは、

ややもすれば女性のヘテロトピア（異所性）という別種のユートピア（プレシアドにとってはディストピア）、異性愛体制の反転的内面化としての閉鎖空間を作り出しかねない。異性愛体制批判がいつのまにか男女の分断を前提とした（分離主義）、男主義ならぬ女主義のホモソーシャル権力を生み出してしまう。異性愛体制に対する問題提起や突破口の一つとして同性愛を利用しながらも、最終的にプレシアドが同性愛を批判し乗り越えようとするのはこのためである。同性愛は異性愛の舞台装置のうえで演じられる対抗劇であり（異性愛の鬼子としての批判的価値は否定されるべきではないが）、同性愛の真理は異性愛なのである（これが第４章のドゥルーズの「同性愛」概念に対する批判の要である）。そこにはトランスの運動力がない。重要なのは、女性であることや男性であること（それらの存在が「自然」であれ「本質」であれ、「固有＝本来のもの」であれ「工作されたもの」であれ）の存在論ではなく、その生成変化であり、生成変化のテクノロジーを具体的に手に入れることである。フェミニズムを観念論の呪縛から解放し、唯物論化すること。「性差の認識論」を突破し打ち破るために、身体レベルでの改造を可能にするテクノロジーを、男女のみならず、あらゆる「身体たち」が手に入れること。これがプレシアドにとってダナ・ハラウェイの「サイボーグ・フェミニズム」の意義である。「ダナ・ハラウェイが登場するまでは、フェミニストの「テクノロジー」分析の大半〔……〕は、性テクノロジーを生殖技術の星座に還元してしまっていた。この種のフェミニストたちの歩みの難点は、女性というカテゴリーを本質化し均質化する罠に陥ることである」（本書一六二―一六三頁）。

フェミニズム的分断を超えて

従来のフェミニズムは二重の問題を抱えている。一つには、女性の差異や特異性の分析に集中するあまり、男性の身体や存在も社会権力によって構築されたものであることを忘却し、逆に自然化＝本質化してしまう（男性身体の可塑性の忘却）。そのため異性愛の固定的な分断支配を助長する。ボーヴォワールは「人は女に生まれるのではなく、女になるのだ」と言い、フェミニズムの前進を促したが、その言葉の「男性版」、つまり「人は男に生まれるのではなく、男になるのだ」と言うことができなかった。本書でのフーコー的考古学の分析の中心は、もちろん女性なるもの

と女性の身体の性生産テクノロジーとその暴力性・権力性の解明にあるが、また同時にプレシアドは、ペニスの美学や近代的な工場や戦争におけるロボットとしての男性の身体の系譜学を詳細に追跡することで、男性の身体も政治的・社会的な「義体」の権力によって工作されており（しかもヒエラルキー的に）、決して「自然」でも「ニュートラル」でもないこと、そして男性身体の社会工作がどのようにして女性身体の工作と連動しているかをも描出している。プレシアドの言う「家父長制的－植民地主義的異性愛」体制は、男女の身体のどちらにも相互補完的に働きかけているのであり、この「弁証法」を見逃してはならない。

二つ目には、多くのフェミニズムは、女性なるものを工作する性テクノロジーを家父長制の男性権力と同一視し、悪魔祓いしてしまうために、性テクノロジーの反体制的な使用や技術のクィア化を想像することができず、実質的・具体的な戦いの武器を失ってしまう。それに対して、プレシアドは、権力が使用している支配の道具・支配テクノロジーを被支配者たちが流用・奪取・再利用することによって、分断統治を打ち破り連帯する可能性を主張する。支配権力側がみずからの原動力・武器・道具としているシステム（資本主義的生産様式）やエージェント（労働者）を横領して当の体制側に向け返す発想は、資本家の「武器＝道具」として「使用＝搾取」されていた「労働者」を覚醒させ、資本主義システムに転換（革命）をもたらそうとしたマルクスの戦略を彷彿とさせる。これはいわばクィアなマルクスであり、マルクスのクィア化である。ここには、身体と心をともに社会的に工作され支配された者同士（男女のバイナリーであれ、それ以外のセクシュアリティ存在であれ）が、同じ被工作体として分断工作を乗り越えて、工作権力を自分たちの手に取り戻すために連帯する新たな性のプロレタリアートの姿がある。

ディルドの哲学

このジェンダー領域に移植された新プロレタリアート（トランスな身体たち）の戦い（男女の分断支配を超えた、あらゆる存在のトランスのための戦い）の戦略基盤となるのが、性テクノロジーであり、プレシアドはその哲学的・技術的モデルとしてディルドを立てる。一般にディルドはペニスの模造品と考えられている。実際にレズビアンやトランスたちがディルドを使用すると、「偽物

を使ってまでペニスを欲している」とか「ペニス主義の内面化にすぎない」といった揶揄や批判が、男根主義者からもレズビアン（特にラディカル・レズビアン）たちからも出てくる。しかしこうした批判は、〈ペニス＝自然あるいは起源〉という設定・想定に立脚しており、そもそもペニス自体がそのように社会や通念によって「自然」なものとしてすでに「工作」された義体であり、言ってみればディルドであることを忘れている（あるいはほおかぶりしている）。それはみずからの工作物としてのあり方を不可視にするほど強力なメガ・ディルド（ラカン風に言えば「マスター・シニフィアン」）だというだけのことであって、立派だろうが貧相だろうがディルドにはかわりがない。いや、自然な快楽を超えた人工的な快楽を最大限に与えるがゆえに「立派なペニス」としてまかり通るのだと言うべきだろう。

プレシアドは、自然化され魔術化されたペニスの帝国の化けの皮を剝ぎ、義体的なディルドの群島に連れ戻す。ここではデリダの脱構築、とくに代補（supplément）の概念が利用されている。代補（サプリメントには薬物的な用法もある点に注目）は、なにか起源に代補すべきものが先在することを想定させるが、しかし実際には代補の活動や行為がなされて初めて、「事後」的に起源や先行者（アプリオリなもの）は産出される（その意味であらゆる起源的なものはノスタルジー効果である）。たとえ先在的なものがあったとしても、代補作用がなければそれは端的な無であり、なんらかのシステムや体制を保証するものではいささかもない。むしろシステムの穴、その無能力と不可能性を証明する亀裂である。この意味で、ペニスあるいはファルスは端緒から自己去勢＝自己脱構築を起こしている（立つと同時に萎えている）のであって、それは根源的にはディルドだと言ってよい。「ディルド（工作物・偽物）＝ペニス（自然・本物）の模倣」という通念図式は、万物は転移するディルドであるというこの根源様態（世界の至る所にディルドという「穴」が「立って」いるという「真理」）を覆い隠すための想像界の幻想、穴埋めにすぎない。

ディルドの存在様態こそが、あるいはディルド造成術（テクトニクス）こそが、世界の真理であること、少なくとも「急所」であることを明らかにしなければならない。ディルド（バイブレーター）は最初はヒステリー治療における

男性による女性身体の支配ツール、医学的な知と技術による女性身体の管理ツールであった（本書一一一―一三五頁）。しかしたとえ最初の意図や存在が男根主義的・異性愛主義的・植民地主義的であったとしても、使用されたテクノロジーが永遠に初期の目的にのみ奉仕し続けるとは限らない。あらゆるツールは権力的な使用法もできれば、反権力的な使用法、（当初のエージェントの意図や目的からみれば）「クィア」な使用法も、工夫次第でいくらでも可能である。フーコー的な考古学ないし系譜学の手法を用いながらプレシアドが描くディルドの歴史は、まさにこのテクノロジーの可塑性（変身可能性）のよい例である。女性のヒステリー症を医学知が認知・確証し治療するためにヒステリーを人工的に引き起こす医療器具として発明されたバイブレーター（ディルド）が、その後、医学の帝国の診察台を離れて、小さな家庭のベッドや椅子のうえに移動すると、それは生殖目的から解放された純然たる快楽のためのツールとして再活性化するのである。一九世紀に開発されたマスターベーション抑止のためのさまざまな器具も、その後、ＢＤＳＭやレズビアン文化のなかで快楽ツールへと反転した（拘束具やピアシング等々）。どちらの場合も、医療目的・治療目的の道具であるときは奨励されるが、その同じものが反転し「サブカル化」すると非難・軽蔑・バッシングの対象になるというこの価値変化自体が、権力の本質と急所を示している。

トランスの生政治＝性政治

プレシアドが描くこうした支配テクノロジーの反転実践の横領戦略は、フーコーの権力論、生政治論に多くを負っている。フーコーが晩年に彼のライフワーク、最終的な仕事としたのが『性の歴史』だったことも意味深長であるが、フーコーがいわゆる「ミクロ権力論」を展開し、従来の左右両極の権力論（どちらも結局はトップダウン方式のマクロ権力論に帰着する）を刷新した功績は大きい。伝統的には権力というと、なにか強力な権限や権力や権威をもった「（お）上」から高圧的・抑圧的・弾圧的に命令や禁止として否定的に押しつけられる明確な（暴）力というイメージであるが（とくに家父長制権力はこうしたイメージで語られることが多い）、そうではなく、具体的なささやかな小物類・小道具を通して私たちの小さな身の回りに浸透し、私たちの小さな日々を、感（受）性を、無意

識レベルの感情や行動パターンを、そして欲望を、構築し工作する生産的な権力のあり方、これがミクロ権力であり、生政治権力である（本書一六六―一七〇頁）。一見したところ、個別の差異に対応した、サービスのよい、快適でエンターテインメントな、そうした柔らかな権力空間、場合によっては「優しさ」と「寄り添い」によって抱擁され、しかしじわじわと真綿で首を締めつけられるような権力空間。むろんマクロとミクロの二つの権力は別々に作動するのではなく、二重に絡み合いながら駆動するのであるが、従来の権力論は後者のミクロ権力に対する眼差しが弱かった。セクシュアリティとは、このミクロ権力が最も日常的に稼働している現場であり、真っ先に踏み込むべき闘争の現場である。ディルドを代表として、一見卑属にみえる多種多様な性管理と性生産の道具類を権威ある医学言説と接続しつつ、性のミクロ権力、性の生政治をプレシアドが描くとき、フーコーの生政治論とプレシアドのトランス存在とが、思想と実存と運動のなかで見事に連結している。そしてミクロなレベルにおける生権力＝性権力の生産メカニズムをしっかりと把握すればこそ、ミクロなレベルでの反乱が、支配テクノロジーを横領し反転させる戦略が有効になる。世界を変えるのに、世界をトランスさせるのに、巨大な権力闘争や革命転覆は必要ない。必要なのは、いまここにある小さなディルドの潜勢力をラディカルに肯定し、拡大することなのだ。

生殖主義からの脱出

ディルドの論理を全面化すること。それは性にまつわる身体マップを書き換えることを意味する。伝統的な性概念や性医学・性科学は、男女の性的身体を生殖の行為と能力によって規定してきた。生殖にかかわる身体部位（つまりペニス、ヴァギナ、子宮）にいわゆる性感の中心を設定し、それ以外の部位（たとえば、鼻、耳、指、足など）は本来性感があってはならない（あるはずがない）場所とされ、それらの部位で性感を得るとしても、それは副次的であり、さらには変態や倒錯あるいは病とみなされた。この点はセクシュアリティを社会的な構築物と見るフェミニズムにおいても、また自然的なセックスと社会的なジェンダーを区別し、社会的なジェンダーを重視した現代性科学の父ジョン・マネーでも同様である。つまり男女を問わず、性の身体性は生殖を軸にしてその地図が作り出され、そ

の地図をガイドにして身体的な性リビドーの経済は運営・管理されていたのである。

ディルドはこの身体地図を書き換え、身体という地殻・地層の動態が含みもつ潜勢的なエネルギーを至る所に転移させ、解放する。これがプレシアドの言うディルド造成術(テクトニクス)である。第2章「カウンターセックスの反転実践」で紹介されているディルド造成術に眉を顰める人も多いだろうが、ラディカルかつ挑発的でありながら、ユーモア溢れる実践は、まさに生殖器の中央集権体制に反抗(カウンター)し、身体の性快楽センターを分散・拡散(デリダ流に言えば「散種」)させ、たえず転移する性感の新たな身体マップを作り出すテクノロジーである。これはプレシアド流の「器官なき身体」論であり、「地図作成術」である。ここにドゥルーズ／ガタリの多数多様体としての身体(個体)の思想が、セクシュアリティのフィールドに移植され、受け継がれている(性にまつわる身体地図やリビドー整流の問いはすでに『アンチ・オイディプス』で提出されている)。大雑把にドゥルーズ／ガタリのタームで言えば、プレシアドは、ツリー型のセクシュアリティではなく、リゾーム型のセクシュアリティを構想していると言えるだろう。その根源的な運動の可能性をプレシアドは、ドゥルーズ／ガタリのように「同性愛」に見るのではなく、「トランス」のうちに見るのであり、プレシアドにとっては、「トランス」こそが真に「ノマド」的な性のあり方なのである。

ポストヒューマンの性

多くのフェミニズムですらが想定してしまっている、生殖器官への性エネルギーの集中管理の暴力性とその諸問題を、転移する性快楽メカニズムとしてのディルドは抉り出す。このディルドという代補物・工作物が具体的な水準でも象徴的な水準でも示しているのは、人間社会を長い間縛ってきた生殖という必要事(この単なる必要事がいつのまにか「必然性」や「宿命」に、また生殖主義というイデオロギーにすり替えられてきた)からの身体たちの解放の可能性である(女性の身体であれ、男性の身体であれ、ゲイやレズの身体であれ、さらに障害者の身体であれ)。実際、生殖の必要に拘束されつつそこに根拠を見出すバイナリーな異性愛主義は、生殖医療や遺伝子工学の発達によって根拠を失った(これらの技術が確立される以前も実は無根拠ではあったが)。もはや人類は、世代の再生産(リプロダクション)(生殖)

をおこなうのに、「自然」と想定されてきた性行為を必要としない。どんなに洗練された論拠を積み上げても結局は生殖の必要性に帰着してきたバイナリズムの正当性は、それが立脚してきた「自然主義」（似非自然についてのイデオロギーにすぎなかったが）それ自体によって否定される。生殖の「自然」のメカニズムが「自然」の生殖行為の不要さを肯定したのである。この単純な生殖技術の発展は、社会的なジェンダー幻想を徹底的に打ち壊すその単純さ、あまりのシンプルさにおいて深甚なものである（この単純さからまた別種の新たな複雑さも生じてくるが、その議論は今はしない）。また、生命科学や性医学の新知見は、「自然」の生命体や動物の新生児においても、雄雌のバイナリーに分割できないインターセックスの存在を単に「自然」のレベルで否定できなくなっている。二〇二〇年の講演『あなたがたに話す私はモンスター』でもプレシアドが述べているように、いまだにバイナリーな性の認識論や自然主義を信じている人々は、かつてのコペルニクスの時代において天動説を信じていた人々と変わりないのである。

この生テクノロジー（性テクノロジーはその一部である）の全面的な導入が、ダナ・ハラウェイ以前／以後のフェミニズムを切り分けるエポック・メイキング的な契機である。プレシアドはハラウェイのいわゆる「サイボーグ・フェミニズム」をさらに推し進めようとしているが、それは私たちの文字どおり「革命」的な技術環境の変化、生命・医療・情報・化学・工学における新テクノロジーや新科学による唯物的な裏付けをもっている。ヴィルヘルム・ライヒの時代においては、社会構築主義的なレベルで、または思想や観念の思弁的なあるいはコンセプチュアルなレベルで（つまりマルクス流に言えば「上部構造」のレベルで）夢見られた「性革命」（とそれにもとづく社会革命）が、さまざまな領域の技術発明によって「実装」化され始めたとも言えるだろう。プレシアドは、有力な男性ホルモンであるテストステロンを注射することによって、薬学的に自身の身体を男性にトランスさせた。まさに生成変化を身をもって薬物的に「体現」してしまったのであり、ドゥルーズ／ガタリが思想的に展開した「分子的反乱」をまさにフィジカルに、素朴に分子的なレベルで達成してしまったのである。

この流れを安直にレイ・カーツワイル等が主張する「ポストヒューマン論」や「トランスヒューマン論」に接続することは慎まなければならないが、もちろん、いわゆるポストヒューマン状況とプレシアドの『カウンターセックス宣言』とは大いに関係があるだろう。しかしプレシアドは、カーツワイルのようにシンギュラリティの神学に陥ることはない。サイボーグ技術や生命工学やＡＩを使って、セクシュアリティの拘束からの解放神学や新たなセクシュアリティのユートピアは語られない。性の解放政治はありえても、すべてが救済される解放神学はありえない。プレシアドは『……モンスター』のなかで、「彼／彼女」のトランスの経験のなかに英雄的なところは一つもないと述べている。巨大な未来予想図もない。「クィア哲学を語ることは、ガイドブックをもたず、目に見えない地図を作りながら旅をすることであり、最終的には、どんな決まったプログラムもなく、目的も見えないまま、《アーカイブ》を発明することなのである」（本書二二二頁）。

トランスクィアの身体的コミュニズム

トランスの経験は日常的な経験であり、けっして敷居の高いものではない。今までも起こってきたように、本を読んだり、映画を見たりして人生が変わる人もいるだろうし、芸事やスポーツ、さらには新しい友人や恋人との出会いで自分が変わる人もいるだろう。アルコールを飲んだり、クスリをやって「飛ぶ」人もいるだろう。ファッションや美容整形で新しい自分になる人もいるだろう。それらも立派なトランスの経験であり、人間はいつの時代もそうしたトランス経験と付き合いながら、それを利用しながら（さらにそれをコントロールしながら）、生きてきたのである。そこに今後は、その日の気分によって目や髪や皮膚の色を変えたり、性別を変えて出かけたり、自分の感覚情報の範囲をコントロールするトランス技術が付け加わってくるかもしれない。そうした日常生産のテクノロジーの進化と浸透の深度を考えればこそ、トランス・テクノロジーの共同管理・共同運営と自己決定権の確立へ向けた思想と制度設計が必要だろう。トランスの自由と権限と実効性の共同生産・共同分配の構築。「リバタリアン的身体による惑星規模の協働主義、すなわち、地球のふところで地球とともにある（すべての）生ける身体の協働作業の構築」（本書三三頁）。「惑星規模の身体的コミュニズム」（本書八頁）とい

うと話が大きくなりすぎるきらいはあるが、しかしこの義体たちのコミュニズムが伝統的なコミュニティとは比べものにならない広がりと速度のなかで展開せざるをえないことは確かである。義体的コミュニズムは、義体的な新たな種族と世代産出とセクシュアリティ（ドイツ語で言えば、どれもゲシュレヒト Geschlecht である――デリダの「ゲシュレヒト」論を参照のこと。たとえば拙訳『哲学のナショナリズム』）を生み出し、世代間倫理を始めとする新たな倫理や責任の問いを召喚するだろう。トランスクィアの政治や責任や倫理が求められ、それが来たるべき社会革命になる。

家庭内生殖にとどまらず、生殖の論理一般を免れ、ヴァーチャル化しアバター化するディルドの性テクノロジーが普遍化してゆくとき、社会の基礎単位である家庭や家族のあり方は根本的に変容し、翻って社会全体も変容していく。性の革命こそ真の社会革命である。あるいは社会の急所は、性の可塑性の自己決定権にある。フーコー、ドゥルーズ、デリダが希求した来たるべき開放的な社会のプロジェクトは、カウンターセックスのトランスクィアな構想力としてバトンリレーされた。プレシアドはFDD（フーコー、ドゥルーズ、デリダ）の思想を現代と未来世界において再生させる、彼らの異端性の正統な後継者である。神学的・社会的・政治経済的な伝統的な契約（実はこれらは私たちの知らぬ間に密輸入された「契約」にすぎない）をパロディ化した「カウンターセックス契約」に、あなたたちは驚き、抵抗や反発をさえ感じるかもしれない。しかし、なぜそうした抵抗や反発が生じるのかを考えてみよう。そのとき抵抗や反発は新たな気づきの突破口となるだろう。そして、この契約の呼びかけ（アピール）の意義も理解できるだろう。それは特定の利害関心のための契約ではなく、真の社会革命とその土台となる存在論的革命へ向けた賭けの決意表明という意味でのマニフェストなのである。

二〇二二年八月四日　雷鳴轟く一日の明け方に

藤本一勇